

# 一兵卒と銃

南部修太郎

青空文庫



霧きりの深ふかい六月ぐわつの夜よるだつた。丁度ちやうど N原はらへ出しゅつ張演習ちやうえんしゅの途とじや  
 上うのこことで、長ながい四列縱隊れつじゆうたいを作つくつた我我われわれの A 歩兵聯隊ほへいれんたいは  
 C 街道かいだうを北きたへ北きたへと行進かうしんしてゐた。

風かぜはなかつた。空氣くうきは水みづのやうに重おもく沈しづんでゐた。人家じんかも、燈と  
 灯もしびも、烟はたけも、森もりも、川かはも、丘をかも、そして歩あるいてゐる我我われわれの體からだ  
 も、灰はひを溶とかしたやうな夜霧よぎりの海うみに包つつまれてゐるのであつた。頭づじや  
 上うには處處しよしよに幽かすかな星影ほしかげが感かんじられた。

「おい小泉こいづみ、厭いやに蒸むすぢやないか：：」と、私わたしの右隣みぎとなりに  
 歩あるいてゐる、これこれも一年志願兵ねんしぐわんへいの河野かうのが囁ささやいた。

「さうだ、全まつたく蒸むすね。悪わるくすると、明日あしたは雨あめだぜ：：」と、私わたし

は振り向き様に答へた。河野の眠さうな眼が闇の中にチラリと光つた。

「うむ……」と、河野は頷いた。「然し、演習地の雨は閉口するな……」と、彼はまた疲れたやうな聲で云つた。

「ほんとに雨は厭やだな……」と、私はシカシカする眼で空を見上げた。

夜は二分更けてゐた。「遼陽城頭夜は更けて……」と、さつきまで先登の一大隊の方で聞えてゐた軍歌の聲ももう途絶えてしまつた。兵營から既に十里に近い行程と、息詰るやうに蒸し蒸しする夜の空氣と、眠たさと空腹とに壓されて、兵士達は疲れきつてゐた。誰もが體をぐらつかせながら、まる

で出来る悪い機械人形のやうな足を運んでゐたのだつた。隊

列も可成り亂れてゐた。

わたしは

私の左側ひだりがはにゐる中根二等卒なかね とうそつはもう一時間も前から半分

くち

口をダラリと開けて、眠つたまま歩いてゐた。平生へいぜいからお人好

しで、愚圖ぐづで、低能ていのうな彼は、もともとだらしのない男をとこだつたが、

今は全く正體しやうたいを失つてゐた。

彼は何度私の肩かたに倒れかゝつた

か知れなかつた。そしてまた何度私は道の外そとへよろけ出さうとす

る彼かれを抑おさへてやつたか知れなかつた。

「おい、寢ねちやあ危あぶないぞ：：」と、私は度毎たびごとにハラハラして彼

の脊中せなかを叩たたき著つけた。が、瞬間しゆんかんにひよいと氣きが附ついて足元あしもと

を堅かためるだけで、また直すぐにひよろつき出すのであつた。

「みんな眠つちやいかん……」と、時時我我の分隊長の  
高岡軍曹は無理作りのドラ聲を張り上げた。が、中根ばかり  
ではない、どの兵士達ももうそれに耳を假すだけの氣力はな  
かつた。そして、まるで酒場の酔ひどれのやうな兵士の集團は  
濕つた路上に重い靴を引き摺りながら、革具をぎゆつぎゆつ軋  
らせながら劍鞘を互にかち合せながら、折折寢言のやうな唸  
り聲を立てながら、まだ五六里先のN原まで歩かなければならな  
かつた。

「F町はまだかな……」とまた河野が振り向いて、思ひ出したや  
うに訊ねた。

「もう直きだ。よつ程前にE橋を渡つたからな……」と、私は眠

たさを堪へながら生返事をした。

「さうか、それでもまだ先はなかなか遠いなあ……」と、河野は右手の銃を重さうにずり上げながら云つた。

「うん、それもさうだが、何しろ己はもう眠くて閉口だ。此處らでゴロリとやつちまひたいな……」

「全くだ。今一寝入させてくれりやあ命も要らないな……」

「はは、かうなりやあ人間もみじめだ……」と、私は暗闇の中で我知らず苦笑した。

河野も私もそのまま口を噤んだ。そして、時々よろけて肩と肩をぶつけ合つたりしながら歩いてゐた。私はもう氣になる中根の事なんかを考へる隙はなかつた。自分自身まるで地上を歩い

てゐるやうな氣持はしなかつた。重い背囊に締め著けられる肩、銃を支へた右手の指、足の踵——その處處にツキツキするやうな痛みを感じながら、それを自分の體の痛みとはつきり意識する力さへもなかつた。そして、——寢てはならん……と、一所懸命に考へてはゐながら、何時の間にかトロリと瞼が落ちて、首がガクリとなる。足がくたくたと折れ曲るやうな氣がする。はつと氣が附くと、前の兵士の背囊に鼻先がくつついてゐたりした。「眠つては危険だぞ。左手の川に氣を附ける……」と、暫くすると突然前の方で小隊長の大島少尉の呶鳴る聲が聞えた。私はきよつとして眼を開いた。と、左手の方に人家の燈灯がぼんやり光つてゐた——F町かな……と思ひながら闇の中を見



透すと、街道に沿うて流れてゐる狭い小川の水面がいぶし銀のやうに光つてゐた。霧は何時しか薄らいで來たのか、遠くの低い丘陵や樹木の影が鉛色の空を背にしてうつすりと見え

た。  
 「志願兵殿、何時でありますか……」と、背後から兵士の一  
 人が訊ねた。

「一時十五分前だ……」と、私は覺束ない星明りに腕時計をすかして見ながら答へた。

が、さう答へながらも夜がそんなに更けたかと思ふと同時に、私の眠たさは一さう濃くなつた。そして、ふらふらしながら歩き續けてゐる内に現實的な意識は殆ど消えて、變にぼやけた頭の

なかそぼやともだちの顔が浮び上つたり、三四日前にK館で見た活  
 中(なかに)に祖母(そぼ)や友達(ともだち)の顔(かほ)が浮(うか)び上(あ)つたり、三(さん)四(よ)日(にち)前(まへ)にK館(くわん)で見(み)た活  
 わつどうしやしんばめんはし  
 動(うづろ)寫(つろ)眞(まこと)の場(ば)面(めん)が走(はし)つたりした。——夢(ゆめ)かな：：と思(おも)ふと、木(き)  
 の空(うづろ)洞(つろ)を叩(たた)くやうな兵(へい)士(し)達(たち)の鈍(にぶ)い靴(くつ)音(おと)が耳(みみ)に著(つ)いた。——歩(ある)  
 いてるんだな：：と思(おも)ふと、何(いつ)時(ま)の間(ま)にか知(し)らない女(をんな)の笑(わら)ひ顔(がほ)が  
 眼(め)の前(まへ)にはつきり見(み)えたりした。仕(しま)舞(まひ)には、そ(そ)のどつち(どつち)がほんと  
 の自(じ)分(ぶん)か區(く)別(べつ)出(で)來(き)なかつた。そ(そ)して、時(とき)時(とき)我(わたし)知(し)ら(ず)ぐら(ぐら)  
 とひよろけ出(だ)す自(じ)分(ぶん)の體(からだ)をどう(どう)す(す)る(る)こ(こ)と(と)も出(で)來(き)な(な)かつ(つ)た。  
 なんぶん  
 何(なん)分(ぶん)か經(た)つた。突(とつ)然(ぜん)一(ひと)人(り)の兵(へい)士(し)が私(わたし)の體(からだ)に左(ひだり)から倒(たふ)れかか  
 った。私(わたし)ははつ(と)として眼(め)を開(ひら)いた。その瞬(しゆん)間(かん)私(わたし)の左(ひだり)の頬(ほ)はな  
 かに厭(いと)やと云(い)ふ程(ほど)突(とつ)き上(あ)げら(ら)れた。  
 「痛(いた)い、誰(だれ)だつ(つ)：：」と、私(わたし)は體(からだ)を踏(ふ)み應(こた)へな(な)が(が)らそ(そ)の兵(へい)士(し)を突(つ)

き飛ばした。と、彼は闇の中をひよろけてまた背後の兵士に突き  
 當つた、「氣を附けろい……」と、その兵士が呶鳴つた。彼はや  
 つと我に返つて歩き出した。  
 「中根だな、相變らず爲様のない奴だ……」と、私は銃身で  
 突き上げられた左の頬を抑へながら、忌々しさに舌打ちした。  
 が、この出來事は私の眠氣を瞬間に覺ましてしまった。闇  
 の中を見透すと、人家の燈灯はもう見えなくなつてゐた。F町  
 は夢中で通り過ぎてしまつたのだつた。そして、變化のない街  
 道は相變らず小川に沿うて、平な田畑の間をまつ直ぐに走つて  
 ゐた。霧は殆ど霽れ上つて、空には星影がキラキラと見え出し  
 た。ひんやりした夜氣が急に體にぞくぞく感じられて來た。

「おい河野……と、私は變な心細さと寂しさを意識して、  
 右手を振り向いて詞を掛けたが、河野は答へなかつた。首をダラ  
 リと前に下げて、彼は眠りながら歩いてゐた。

——然し、みんなやつてるな……と、續いて周圍を見廻した時、  
 私は夜行軍の可笑しさとみじめさを感じて眩いた。四列縦隊  
 は五列になり三列になりして、兵士達はまるで夢遊病者の  
 やうにそろそろ歩いてゐるのだつた。指揮刀の鞘の銀色を闇の  
 なかひらめの中に閃かしてゐる。小隊長の大島少尉さへよろけながら歩い  
 てゐるのが、五六歩先に見えた。

が、寢そけてしまつた私の頭の中は變に重く、それに寒さが加  
 はつて來てゾクゾク毛穴がそば立つのが堪らなく不愉快だつた。

わたしは首をすくめて痛む足を引き摺りながら厭や厭や歩き續けてゐた。

「さうだ、もう月が出る時分だな……」と、暫くして私は遠く東の方の地平線が白んで來たのに氣がついて呟いた。その空の明るみを映す田の水や、處處の雑木林の影が蒼黒い夜の闇の中に浮き上つて見え出した。私はそれをぢつと見詰めてゐる内に、何となく感傷的な氣分に落ちて來た。そして、そんな時の何時もの癖で、Sの歌なんかを小聲で歌ひ出した。何分かがさうして過ぎた。

と、いきなり左の方でガチャガチャと劍鞘の鳴る音がした。ゴソツと靴の地にこすれる音がした。同時に「ウウツ……」と唸

る人聲ひとごゑがした。私がぎよツとして振り返かへる隙すきもなかつた。忽たちまち夜の暗闇くらやみの中に劇なげしい水煙みづけむりが立たつて、一人ひとりの兵士へいしが小川をがはの中にバチヤンと落おち込んでしまつた。

——とうとうやつたな……と、私わたしは思おもつた。そして、總身そうみに身み顫ふるひを感じかんながら立たち留どまつた。中根なかねの姿すがたが見みえなかつた。小川をがはの油あぶらのやうな水面すゐめんは大おほきく波立なみだつて、眞黒まつくろな人影ひとかげが殴こはれた蝠かうも傘りがさのやうに動うごいてゐた。

「誰だれだ、誰だれだ……」と、小隊せうたいの四五人にんは川岸かはぎしに立たち止どまつた。「中根なかねだ……」と、私わたしは呶どな鳴なつた。

混亂こんらんが隊伍たいごの中なかに起おこつた。寢呆ねぼけて反はん對たいに駈かけ出だす兵士へいしもゐた。ポカンと空そらを見み上げてゐる兵士へいしもゐた。隊列たいれつの後尾こうびにゐ

た分隊長の高岡軍曹は直ぐに岸に駈け寄つた。

「早く上げてやれ……」と、彼は呶鳴つた。

中根は水の中で二三度よろけたが、直ぐに起上つた。深さは胸程あつた。

「おい銃だよ、誰か銃を取つてくれよ……」と、中根は一所懸命に右手で銃を頭の上に差し上げながら呶鳴つた。そして、右手でバチャバチャ水を叩いた。割に流れのある水はともすれば彼を横倒しにしさうになつた。

「大丈夫だ、水は浅い……」と、高岡軍曹はまた呶鳴つた。

「おい田中、早く銃を取つてやれ……」

「軍曹殿、軍曹殿、早く早く、銃を早く……」と、中根は岸

に近寄らうとしてあせりながら叫んだ。銃はまだ頭上にまつ直ぐ差し上げられてゐた。

「田中、何を愚圖々々しとるかつ……」と、軍曹は躍氣になつて足をどたどたさせた。

「はつ……」と、田中はあわてて路上を腹這ひになつて手を延ばした。が、手はなかなか届かなかつた。手先と銃身とが何度か空間で交錯し合つた。

「留つとつちやいかん。用のない者はずんずん前進する……」と、騒ぎの最中に小隊長の大島少尉ががみがみした聲で呶鳴つた。

岸邊に丸くかたまつてゐた兵士の集團はあわてて駈け出した。



わたしもそれに續いた。そして、途切れに小隊の後を追つて漸くもとの隊伍に歸つた。劇しい息切れがした。

間もなく小隊は隊形を復して動き出した。が、兵士達の姿にはもう疲れの色も眠たさもなかつた。彼等は偶然の出来事に變てこに興奮して、笑つたり呶鳴つたり、飛び上つたりしてはしやいでゐた。大地に當る靴音は生き生きして高く夜の空氣に反響した。

「とうとう『馬さん』やりやあがつた……」と、一人の兵士がげらげら笑ひ出した。

「選りに選つて奴が落ちるなんてよつぽど運が悪いや……」と、一人はまたそれが自分でなかつた事を祝福するやうに云つた。

「また髭にうんと絞られるぜ……」

「可哀想になあ……」

中根熊吉の「馬さん」は二年兵の二等卒で、中隊でも

ノロマとお人好しとで有名だった。教練の度毎にハマをや

つて小隊長や分隊長に小言を云はれ續けたつた。戦友

達にもすつかり馬鹿にされてゐた。鼻が低くて眼が細くて、何

處か間の抜けた感じのする平べつたい顔——その顔が長いので

「馬さん」と言ふ綽名がついた。が、中根は都會生れの兵士

達のやうにズルではなかつた。決して不眞面目ではなかつた。

彼は實際まつ正直に「天子様に御奉公する」積りで軍

務を勉強してゐたのである。が、彼の生れつきはどうする事

も出来なかつた。で、彼はムキになればなるだけ教練や武術に失敗し、上官達に叱りつけられ、戦友達にはなぶり物にされるのだった。——氣の毒だな……と、思ふことが私も度々あつた。

「然し、僕もずる分氣を附けちやあるたんだぜ……」と、私は傍の兵士を顧みた。

「さうですか。でも、ありやあ、いい眠氣覺しですよ……」と、彼は冷淡に答へた。

「ふふ、眠氣覺しも利き過ぎらあ……」

「はつはつはつ、水の中で一生懸命に銃を差し上げた處は好かつたね……」

「とんだ五九郎だ……」と、誰かが呟いた。劇しい笑聲がわつと起つた。

が、暫くすると中根の話にも倦きが來た。そして、三十分も經たない内にまた兵士達の歩調は亂れて來た。眠りが始まつた。みんなは下弦の月が東の空に出て來たのも氣が附かずに酔ひどれのやうに歩いてゐた。

N原の行手はまだ遠かつた。私が濡れしよびれた中根の姿を想像して時時可笑しくなつたり、氣の毒になつたりした。が、何時か私も襲つてくる睡魔を堪へきれなくなつてゐた。

N原の出張演習は二週間程で過ぎた。我我は日日

の劇はげしい演習えんしふに疲つかれきつた。そして、六月ぐわつの下旬げじゆんにまたT市しの居住地きよちうちに歸營きえいした。中根なかねの話はなしはもうすつかり忘れわすられてゐた。中根なかね自身みづかみも相變あひかはらず平ひらぺつたい顔かほににやにや笑わらひを浮うかべながら勤務きんむしてゐた。

歸營きえいしてから三日目かめの朝あさだつた。中隊ちうたい教練けうれんが濟すんで一先ひとまづ解散かいさんすると、分隊長ぶんたいちやうの高岡軍曹たかをかぐんそうは我々われわれを銃器庫裏ぢうきこうらの櫻さくらの樹蔭こかげに連れて行いつて、「休やすめつ……」と、命令めいれいした。私わたしはまた何かなにの小言こごとでも聞きくのかと思おもつて、軍曹ぐんそうの鼻はなの下したにチヨツピリ生はえた口髭くちひげを眺ながめてゐた。

「何なんでえ、何なんでえ……」と、小聲ここゑでいぶかる兵士へいしもあつた。

高岡軍曹たかをかぐんそうは暫しばらくみんなの顔かほを見みてゐたが、やがて何時いつもの

やうに胸を張つて、上官らしい威嚴を見せるやうに一聲高く咳をした。

「今日貴様達を此處へ集めたのは外でもない。この間N原へ行く途中に起つた一つの出来事に對する己の所感を話して聞かせたいのだ。それは其處にゐる中根二等卒のことだ。貴様達も知つとる通り中根はあの行軍の途中過つて川へ落ちた……と、軍曹はジロりと中根を見た。「クスツ……」と、誰かが同時に吹き出した。中根はあわてて無格好な不動の姿勢をとつたが、その顔には、それが癖の間の抜けたニヤニヤ笑ひを浮べてゐた。

——またやられるな……と思つて、私は中根のうしろ姿を見た。

「然るに、あの川は決して淺くはなかつた。流れも思ひの外早か

つた。次第しだいに依よつては命いのちを奪うばはれんとも限かぎらなかつた。その危き急きふの際さい中なか根かねはどうか云いふ事ことをしたか。さあ、みんな聞きけ、此こ處こだ……」  
 と、軍ぐん曹そうは詞ことばを途と切ぎつてドタンと、軍ぐん隊たい靴くつで大だい地ちを踏ふみつけ  
 た。「中なか根かねはあの時とき、自じ分ぶんの身みの危き急きふを忘わすれて銃ちゆうを高たかく差さし上あげ  
 て『銃ちゆうを取とつてくれ……』と、己おれに向むかつて云いつたのだ。即すなはち銃ちゆうを  
 愛あいし守まもる立り派つぱな精せい神しんを示しめしたのだ……」と、軍ぐん曹そうは咳がい一がい咳し  
 た。  
 「抑そもも銃ちゆうは歩ほ兵へいの命いのちである。軍ぐん人じん精せい神しんの結けつ晶しやうである。歩ほ  
 兵へいにとつて銃ちゆう程ほど大だい事じな物ものはない。場ば合あひに依よつてはその體からだよりも大だい  
 事じである。譬たとへば戰せん場ぢやうに於おいて我われ々われが負ふ傷しやうする。負ふ傷しやうは  
 直なる、然しかし、精せい巧かうな銃ちゆうを毀こはしたならば、それは直ならない。況ま

てあの時とき中根なかねが銃じゅうを離はなして顧かへりみなかつたならば、銃じゅうは水すい中ちゅうに無な
  
 くなつたかも知しれない。即すなはち歩兵ほへいの命いのちを失うしなつたことになる。然しかる
   
 に、中根なかねは身みの危き急きふを忘わすれて銃じゅうを離はなさず、飽あくまで銃じゅうを守まもらうと
   
 した。あの行かうゐ爲ゐ、あの精せい神しんは正まさに軍人ぐんじん精せい神しんを立りつ派ぱに發はつ揚やう
  
 したもので、誠まことに軍人ぐんじんの鑑かがみである。一たい體な中根なかねは平へい素そは決けつして成せ
  
 績いせき佳かり良やうの方ほうではなかつた。己おれも度たび度たび嚴げんしい小言こごを云いつた。
   
 が、人にん間げんの眞しん面めん目もくは危き急きふの際さいに初はじめて分わかる。己おれは中根なかねの眞しん價か
  
 を見み誤あやつてゐた。實じつに中根なかねは歩兵ほへいの模範もはん的てき精せい神しんを己おれに見みせて
   
 くれた。實じつに：：と、感かん情じやう的てきな高岡軍曹たかをかぐんそうは躍氣やつきとなつ
   
 て中根なかねを賞しやう讚さんした。そして、興こう奮ふんした眼めに涙なみだを溜ためてゐた。
   
 「貴様きさま達たちはあの時ときの中根なかねの行かうゐ爲ゐを笑わらつたかも知しれん。然しかし、中な



根は正しく軍人の、歩兵の本分を守つたものだ。豪い、豪い

……」

かう云ひ續けて、高岡軍曹はやがて詞を途切つたが、それでもまだ賞め足りなかつたのか、モシヤモシヤの髭面をいきませて、感に餘つたやうに中根二等卒の顔を見詰めた。分隊の兵士達はすべての事の意外さに呆氣に取られて、氣の抜けたやうに立つてゐた。が、日頃いかつい軍曹の眼に感激の涙さへ幽かに染んでゐるのを見てとると、それに何とない哀れつぽさを感じて次から次へと俯向いてしまつた。

が、中根は營庭に輝く眞晝の太陽を眩しさうに、相變らず平べつたい、愚鈍な顔を軍曹の方に差し向けながらにやにや

笑<sup>わ</sup>ひ<sup>ら</sup>を<sup>つ</sup>續<sup>づ</sup>け<sup>て</sup>み<sup>た</sup>。

# 青空文庫情報

底本：「新進傑作小説全集 第十四卷（南部修太郎集・石濱金作集）」平凡社

1930（昭和5）年2月10日発行

初出：「文藝俱樂部」1919（大正8）年12月号

入力：小林徹

校正：松永正敏

2003年12月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 一兵卒と銃

南部修太郎

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>